

新島襄のこころ—イメージを通して— (9)

最初の新島襄伝の題字

竹中正夫

新島襄が永眠して、人びとの涙がいまだかわかぬ間に、彼の同労者であったジェローム・デイヴィス宣教師は、わずか一〇ヶ月の間に、『新島襄先生伝』を刊行した。これは、彼が記述した英文の新島伝の全訳ではなく、それを骨子として多少新しく書き加え、村田勤と松浦政泰が訳出し、明治二十四年一月一七日に大阪の福音社と東京の警醒社から出版されたものである。おそらく、新島襄の永眠一周年にあたつて最もふさわしい記念品となつたにちがいない。同書は、その後も、新島襄伝の基本的なものとして広く読まれて来たことは周知の通りである。

しかし、この最初の新島襄伝に勝海舟が題字を揮毫していることはあまり知られて

いない。新島襄が赤坂の勝邸を四回訪ねていること、揮毫してもらつた「六然訓」を大切にして応接間にかけていたことは知られている。また、新島襄の葬儀に際して、彼の精神をあらわしたことを勝海舟が大書し人びとが弔^{ちやうはい}施として掲げたことは知られている。さらに、若王子山頂の「新島襄之墓」の墓碑は勝海舟の筆によることを知らない人は少い。しかし、最初の新島襄に勝海舟が題字を誌していることを知る人は少い。そのことを指摘して、杉井六郎氏はこのべている。

この伝記には「真身非有象、至理卒無名 廿四年一月 海舟」と墨書する題辭が載せられている。この題辭については、何故か従来検討されることがなかった。

（伝記叢書一〇〇『新島襄先生伝』解説、大空社、一九九二年）

杉井氏によると、この句は、張翥の『全

唐詩卷七〇二にある「宿開照寺光澤上人院」と題する五言律詩の中の二句を採つたものであるという。この詩の真意は何を意味し、またこの二句を新島襄の伝記の題字に撰んだ勝海舟のころは何処にあつたのであろうか。大方の御教示をいただきたく思う。

勝海舟は、敬愛していたアンナ・ホイットニーの墓に「骸化土、靈帰天」と記した。これは、旧約聖書の「コヘレトの言葉」（二ノ七）からとられている。コヘレトの言葉は、さらにつづけて、「なんと空しいことか、すべては空しい」といつている。これは単なる虚無主義でもなく、諦念でもない。人間のすることはすべて空しい。しかし、神のなすことは、すべてときになつて美しいというのがその真意にある。新島襄の生涯をしのびながら、真身の無限さと、究極の道への謙虚さを回想し、心を新しくするように呼かけているかに思われる。

（大学神学部教授）

真乃此家
子理本姓名

志事一月
以耳

